第 11 回 呉西圏域ビジョン懇談会　会議録

日　時：令和６年２月 28 日(水)　18 時 00 分～19 時 10 分
場　所：高岡市生涯学習センター４階ホール

〇開会挨拶
（とやま呉西圏域連携推進協議会 会長）

〇連携事業概要・令和５年度の主な取組み
（事務局による資料説明）
〈質疑なし〉

〇令和４年度の実績報告
（事務局による資料説明）
〈質疑なし〉

〇意見交換
（委員）
行政においてもＰＤＣＡを回すことは必要。2 期ビジョンにおいて 3 年が経過しているところで、成果が出ていないものについて、本質的な修正を行った事業があるのかを教えて欲しい。
また、ＫＰＩを作ることは悪いことではないが、そのＫＰＩ至上主義になっていくと逆に振り回されることになる。例えば、資料の 3－1 の滞在人口率の基準値は策定時の平成 27 年国勢調査ベースでは下がっているように見えて、令和 2 年の国勢調査ベースでは上がっているように見える。これらの表現も含め、どういうふうに見直していくのかっていうことは重要なこと。

（委員）
実数ではなく比率を指標とすることがＫＰＩとして正しいのかどうかという検討も必要だ。

（委員）
滞在人口率には観光人口は入っているのか。例えば、氷見市だと昼は市外に働きに出ている人が多くいらっしゃる。これは高岡や射水でも同様であり、そこを補うために観光人口も増やすことを考える必要がある。

（委員）
漁業について、射水市にはＩＣＴブイ設置について支援いただいている。潮流や水温

等のデータが 30 分おきに取得できるもので、現在は新湊沖のみのため、氷見沖、富山湾など他の海域とも連携してデータ集積し活用できれば良いと思う。水産庁としては漁獲の 8 割を資源管理するということで、そういうものが集積されることによって、将来的に役に立っていくのではないか。

（委員）

震災の影響が当面続くかもしれないが、北陸新幹線敦賀の延伸等が、中長期的にみると、北陸全体においてはプラスに働いてくると考えている。6 市が連携をして、観光資源の磨き上げ、ブランディングを着実に進めていただきたい。

当圏域においては広域のＤＭＯがすでに立ち上がっており、マーケティングやブランディングにおいては強みなのではないかと思っている。見直し時に、ＤＭＯの知見やマーケティング能力、満足度調査の結果を分析して政策につなげていくことは、効果的に観光誘客を図っていくには非常にいいと思うので、ぜひ検討されたい。

（委員）

コロナ禍には文化施設、観光施設でのスタンプラリーなど、地元に密着した事業を展開してきた。歴史と観光というのは非常に密接性があると考えている。この呉西 6 市の中でも、祭りに関することなどいろんなことができると思うので取り組んでいただければ。

（委員）

北陸新幹線金沢―敦賀開業、北陸ＤＣ、大阪・関西万博など、今年・来年は人の動きを呼び込むチャンスのときだと思っている。このタイミングで、共同で歴史文化など、たくさんある素晴らしいものをしっかりＰＲして、興味を持っていただき、そして圏域の周遊コースを作りながら、広く呼びかけて、多くの方々に来ていただきたい。

（委員）

敦賀開業に向けて、県としてもいろいろなことに取り組ませていただいている。昨年の 11 月に福井で行われた全国宣伝販売促進会議でご協力いただき、全国の旅行者に向けて、県西部の観光素材を力強く発信していただいたところ。

能登半島地震があり、3 月 16 日から旅行の北陸応援割を開始させていただくということで、ぜひ西部 6 市の観光に携わる皆様においても活用いただいて、県独自のとやま応援クーポン券も併せて使っていただいて、全国からもお客さんを呼んでいただく。そして、地震で受けた被害を回復していただきたく、県としても一緒にやらせていただきたい。

先日、国立社会保障・人口問題研究所の発表があり、人口減少に関しては、敏感にならざるをえないような状況になっている。移住定住者数は目標値をクリアし、社会動態上均衡を達成しているということはすばらしいこと。

この連携中枢都市圏構想の目的は、人口減少下においても圏域での一定の人口を維持

することによって社会経済の活力を維持していくことであり、期待される役割を果たしている証拠となっている。引き続き、連携中枢都市圏として活動を活発にしていただくことによって、人口が減少しても活力を維持するといった機能を果たしていただきたい。

（委員）
昔の仮説が今通用する時代ではなくなってきており、今後見直すときには変わってきていることをぜひ理解をしていただきたい。今の人口規模でいいのであれば、我々はもう少し経済活性化を感じるはず。それを肌で感じることができないというのは、前提条件が違う可能性もある。

（委員）
まず、指標の基準点がコロナ前でいいのかどうかという議論はやるべきではないか。コロナ禍前に戻ったからよいということではなく、経済が縮小した状態からいかに伸ばすかということをまず考えなければいけない。能登半島地震の影響もあり、指標の見直しとか、或いは、最近、あいの風が城端線・氷見線の経営を担うという大きな動きがあった公共交通のあり方についても、それも踏まえた目標の作り方が必要では。

（委員）
行政と会議所との連携については、さらに前向きに取り組む必要性を感じたところ。産業フェアなど各市のイベントにブースを出し、呉西圏域を知ってもらわなければならない。今日どこで何をやっているという情報が意外と入ってないので、会議所同士の連携をもう少しできればなあというふうに感じている。お互いの動きをしっかりとキャッチした上で、連携というものをこれから考えていくべきではないか。
（委員）
能登半島地震のとき、我々の地域力で、非常に頑張ってカバーしていたのが現状。他市も大変な思いをされたが、これを教訓として、地域住民が自覚をするということで、6 市と連携した地域との活動ができるのかが重要。
観光について、地域の観光資源、または発掘できていないところがある。特に砺波、小矢部、南砺には共通して夜高祭があるが、国や県のスポットライトが当たっていない。また、地元が地元のためにやっている田祭というものもある。それらも網羅することでインバウンド、県外観光客にも目を向けていただけるのでは。

（委員）
富山大学の高岡キャンパスにある金属材料共同研究棟施設のプロジェクトが文科省のＪＳＴ事業の本格型に採択された。各市でもそれぞれ取り組んでおられるカーボンニュートラル・脱炭素化の観点からも、呉西圏域の中でリサイクル、商品化、全国発送、海外輸出することを通じてアルミの循環型社会形成のモデルになれると思う。産学官で連携していけば全国に向けて富山県、呉西圏域を発信できるいい機会だと思うので、ぜひ皆様にもご協力いただき、アルミリサイクルでの連携をとっていきたい。

また、ものづくりを担う従業員が確保できないということは課題であり、ＫＰＩでも海外の方も指標としてとらえていくことが大事なのでは。

地元大学生の県内就職率については、人口減少下では実数で捉えていくことが大事だと思う。大学に進学する人の内７割が県外に出て行ってしまっている。これから進学率は増えてくると思うので、県外に出て行ってしまう女性も増えていく。県外に出て行ってしまうと進学した先で、就職して結婚するケースが多く、ますます、県内人口が減っていくという危機的な状況だと思うので、私たち産業界としても人口を減らさないようにしていかなければ。

○閉会挨拶

（とやま呉西圏域連携推進協議会 副会長）

○閉会

（終了 19:10）